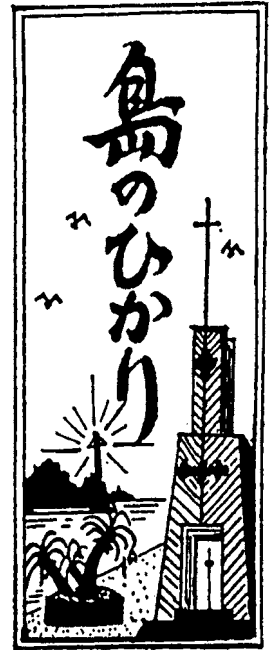




シスター異動報告を終えて

「島のひかり」ホームページアドレス

<https://shimanohikari.jimdofree.com/>

発行

カトリック浦頭教会
 広報委員会
 五島市平蔵町2716
 TEL 0959③0072
 印刷・(株)才津印刷所

桜に思う

主任司祭 工藤 秀晃

何だかんだと言ってはみても、やっぱりそれなりに寒かったような気がした冬が過ぎ、今年もご多分に漏れることなく春の陽気に誘われて、教会境内の桜が見事に咲きました。

毎年このことながら、何故こんなにも桜の花に心ひかれるのだろうかと思ひ、少しだけ桜の開花について調べてみたところ、もしかしたら、春に花咲く他の草花全般にもあてはまるのかもしれないかもしれません、すでにご存じの方も多々おられるかと思いますが、桜が花を咲かせるための必須条件として「しっかりとした冬の寒さ」がなくてはならないのだそうです。前の年の夏に作られ、秋から冬にかけて一時的に休眠状態に入っていた花芽が、冬の寒さに一定期間さらされることによって目を覚まし、春に向けて気温が上昇するとともに再び生長し始め、やがて花を咲かせてあの装いを見せてくれるのだそうです。それだけに、暖冬で寒暖差があまりないと、

花芽の目覚めが上手く行かないために生長も遅れ、自ずと開花も遅くなってしまうのだそうです。

いっけん、素人考えでは穏やかな環境下にあった方が生育も良く、きれいな花を咲かせてくれるように思えるのですが、寒さにさらされる期間が必要であるとは、考えさせられるところがあります。一年近くもの日々を費やして準備し、いざその時を迎えると一斉に花を咲かせ、二週間あまりでその場を新緑へと明け渡して儚くも潔く散って行き、そしてまた、新たな花を咲かせるためにと準備に入る。この姿やありように、ついつい様々なことを重ね合わせて見てしまいます。

どちらかといえば、何だか心痛める出来事を見聞きする日々の方が多くに思えますが、それでも今年も桜は咲きました。春は、主の御復活はやってきました。神様のはからいと人が本来もっている心根の優しさを信じて、また踏み出したいと思えます。

黙想会 感謝の言葉

評議会議長 赤尾 一美

浦頭小教区の黙想会が、三月十日・十一日行われ、福江教会、助任の西田神父様が御指導下さいました。

西田神父様、お忙しい中二日間にわたり、黙想会の講話を私たちに、御指導頂きましてありがとうございます。

昨年、一昨年とコロナ禍の中の黙想会は中止同然となる中今回二日間にわたり、講話と、ゆるしの秘跡を受けることが出来ました事を、改めて感謝致します。



説教して下さった西田神父様

神父様は講話の中で「神よ今あなたはどこに」とのテーマを中心にお話をなされ、これまでの大きな災害、終息がつかないコロナ感染、更に最も杞憂される「ウクライナ」情勢の中で「神よあなたは」と叫びたくなる今、いろんな人が、あらゆる場所で、誰かの為にと奔走するその様の中に、神様は共に働いておられるのではないのでしょうか。との神父様のお話、私たちは決して「自粛警察」にだけには、と思えます。「神よ」と叫ぶ事の出来る信仰を深く痛感させられました。私達はこの二日間の思いを大切な宝物として地域社会、家庭生活に活かしていきたいと思えます。

神父様は黙想会の冒頭で、魚

釣りが大変好きだとの事、聖書の言葉では有りませんが、大きな獲物をすなごる神父様となつて下さい。最後にお体だけには十分ご自愛下さいまして聖務に邁進なされます様に願いました、簡単では有りますが感謝の言葉に代えさせて頂きます。本当にありがとうございます。



信仰の宝 発見

●主の復活の喜びを！

まだ肌寒い三月の初めに灰の水曜日をむかえ、四旬節を過ぎしてきました。主の十字架は私たちに救いに導く証しです。キリストはご自分の受難と死をとおして罪深い人類、そして私たちひとりひとりを救い、永遠の命へと招いてくださいました。

イエスの復活は私たちの行き着くところが想像もできないほどの光に満ちていることを告げています。今年は四月十七日に主の復活を祝います。厳しい寒さの後に迎える春が喜びを運ぶように、主の復活は神の子供である私たちを新しい命の息吹きで満たしてくれます。

「ア(ハ)レルヤ」は「主をほめたたえよ」という意味ですが特に救いの喜びを祝う復活節にふさわしいものです。コロナ禍で聖歌も声高に歌えませんが心の中で思いっきり「アレルヤ」と叫び、主の復活を祝いましょう。

下五島地区合同堅信式

一月十六日、福江教会にて下五島地区合同堅信式が行われ、浦頭小教区からは三名の中学生が堅信の秘跡を受けられました。

高見三明大司教様司式では最後の堅信式であった為、参加した多くの信徒にとっても感慨深い式となりました。

下に今回堅信式を迎えられた三名の方に思いを書いて頂きました。



堅信く私達の決意

堅信は、大人の信者になることだと思えます。そして、大人になれば行動の責任が大きくなると思えます。

僕は今まで、教会でしか祈りをせず生活の中ではあまり祈りをしませんでした。なので、堅信の秘跡を受けることで改めて信者としての自覚を持ち直して、信者として責任ある行動をしていきたいと思えます。堅信後は、稽古などで教えてもらったことを活かし、すべきことを積極的にやっていきたいと思えます。

鍋内 大蔵

僕が堅信を望む理由は、もっとより深く教会のことや神様のことを、人としてどうあるべきなのかを学んでいきたいからです。小・中学校で習ったことを全部覚えきれないけれど、これから勉強にしっかり励んで覚えて

いきたいです。それを覚えたら、次はもっと深いところまで習って教会の役に立てるよう頑張りたいと思います。まだまだ僕は教会のこと、神様のこと、人としてどうあるべきなのかあまりよく分かっていないので、堅信を受けてもっと成長できるように努力します。

堅信後は、中学一年生や小学生に堅信を受けることの大切さなどを教え、何かしら少しでも教会や人の役に立てるよう自分なりに考えて行動できるようにしていきたいです。教会の行事に参加したり、教会のお手伝いを自分からしたり、ミサにちゃんと参加したり、人として小さな気遣いなどを心がけて生活していきたいです。

鍋内 孝志

堅信式を終えて、私は、たくさんの人たちに支えられていることを改めて感じました。見守ってくださったり、挨拶してくださったりなど本当にたくさ

んのことをしてくださいました。これからその恩を少しでも返すことができるよう、がんばっていききたいと思います。

堅信は教会で一人前になることですが、私はまだまだ至らない部分もたくさんあります。なのでこれを機に、その部分を直していこうと思えます。

そのために、自分を見つめ、相手を想うことができる自分を目指そうと思えます。

今年、私は受験生になるので、早くも、教わったことを生かすことができる機会ができてよかったと思えます。

最後に神父様やシスターそして支えてくださったたくさんの方々に感謝します。本当にありがとうございます。こんな私ですがこれからもよろしくお願います。

小林 美結



中村倫明^{みちあき}大司教 着座式

二月二十三日、長崎カテドラル浦上教会で中村倫明大司教(59)の着座式が行われた。式はコロナ禍の中、人数を制限して執り行われたが駐日ローマ教皇大使や各教区の大司教達の参列によって盛大に行われた。またオンラインで中継され、各地で祈りがささげられた。中村大司教は、説教や挨拶で、紋章に選んだ「キリストのように、キリストと共に与えたい」を紹介し、三位一体の神を証し、自らを与えるパンになりたいという望みを力強く述べられた。

司教紋章の説明
DARE UT CHRISTUS, CUM CHRISTO

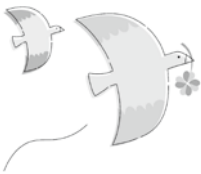


司教のしるしである帽子を下に構え人々に挨拶を行い奉仕いたします。
一粒の麦が人々の所に落ちるともにいて自分を与えることにより、帽子から流れる房は麦の穂と変わり神の豊かな実りがあることを信じ願います。
何よりも、三位一体である神は、すべてを与え尽くすために、ともにしてくださいませ。
三位一体の御父をラテン語 Pater のPで表し、キリストをギリシャ語のΧ με、そして、聖霊を愛のシンボルのハートで表しています。
この三位一体の神をもっとも証しするものとして聖霊とマリアのシンボルをその下に添え、紋章すべてを聖体のシンボルで包み込みました。
わたしも三位一体の神を証し、自らを与えるパンになりたいと、紋章の言葉を、ラテン語で「キリストのように キリストとともに 与えること」にしました。
2021年12月28日 大司教に被選 ペトロ 中村倫明

司教のシンボルである、バクルス(牧杖)はオリーブの木を用い、十字架に繋がったイエスの手が力強く彫られ、裏側のいくつもの手を支えている。
大司教様の「共に」という気持ちを祈り受けとめ、今後のご活躍を祈りましょう。



カトリック教報より転載



初聖体の恵み

二月二十七日、コロナ禍でミサが中止になる中であつたが、多くの信徒が集まり、初聖体式が行われました。去年と同じく一名と少ない人数でしたが、御聖体を頂いて笑顔に溢れた日となりました。

感想

はじめてのごせいたいをいただいて、きんちようしたけどうれしかったです。これからはおいのりやきようかいがっこうのべんきようをがんばりたいです。

あかお よしき



祝!! 洗礼式

小教区では喜ばしい幼児洗礼式が行われました。



移動信徒紹介

夢に向かって五島を旅立たれる若者に幸あれ!!



左から鍋内凌空さん、濱崎沙也加さん、白濱光玖さん

中村長八神父様の ドキュメンタリー

作成進む

青木神父様 投稿(三)

●暁の星サークルと暁星学園の
関係について

一九五三年四月二十六日「良き勧めの聖母マリアの祝日」にプレジデンテ・プルデンテ市で三人の青年によって「暁の星カトリックサークル」が結成されました。彼らが心を動かされた「暁の星なる聖母への祈り」は、暁星学園卒業生のステファノ山本信次郎海軍少将が、ヨーロッパ滞在中に日本の回心のために作った祈りのポルトガル語版を三人の霊的指導者であったジョゼ・マリア・サリオン神父が所持していたものと思われまふ。日系の若者たちのカトリックへの改心を願って「暁の星会カトリックサークル」と命名しました。

暁星学園は、一八八八年五人のマリア会宣教師によって建てられた男子校で現在は幼小中高のカトリック一貫校として今年創立一三三年目です。暁星学園は山本信次郎海軍少将が当時の信徒会長であったころ多くの公教要理の本を日系人司牧のために働く宣教師たちへ送付してまいりました。この山本信次郎氏こそが一九三八年、グアイサラの中村神父の自宅まで時の教皇ピオ十一世が下賜されたグレゴリオ大褒章の勲章を奉持する伝達者となりました。

二〇〇八年の聖木曜日にブラジルの宣教地で帰天した長谷川神父と私が共にマリア会員であり、暁星学園の卒業生でもあるので、「暁の星カトリック・サークル」との関係は一層緊密なものとなりました。中村神父の列福運動の大推進役者で「ブラジル移民の使徒ドミンゴス中村長八神父」の著者「暁の星カトリックサークル」の創立者の一人のペドロ大西弁護士は実に私たち

二人にとつても共通の親友です。ここでも目に見えない神様のみ摂理とマリア様の不思議なお計らいを感じざるを得ません。

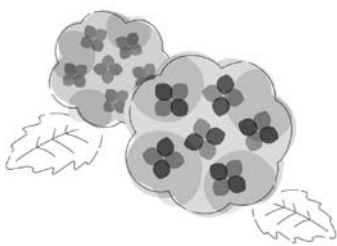
●ドミンゴス中村神父の墓発掘
時の印象について

二〇一五年十二月十五日、一時三十分からアルヴァレス・マシャード市の墓地で、中村神父の埋葬七十五年の節目を迎えて遺体の発掘検証を行いました。黒の大理石の墓石が取り外されて、徐々に白骨化した中村神父のご遺体が見えてきました。「もし腐食していなければ」という

期待し難い期待は薄れてしまいました。しかし、モンセニョールの徴である胸の十字架の緑色に腐食したブロンズのイエス像が彼の身分を黙って語っていました。最初の鹿児島教区長の辞命を拝命していたのです。また金冠で覆った一個の義歯が七十余年の長い時の流れに拘らず燦然と輝いていました。そして彼が生前愛用していたと思われるロザリ

オの球が五から六個まとまってさりげなく出てきました。これらの小物を手の平にのせてしばし中村神父の不屈の宣教精神に肖りたいと祈念したことを覚えていいます。これらの遺品は二〇一一年に私が帰国した際に長崎大司教区事務所にお預けした記憶はありますが、その後一度も堂崎教会を訪問しておりませんので、果たして展示場に陳列されているかどうかは保証の限りではありません。

最後に私が土まみれの遺骨を担いで分析室まで運んで行った際、中村神父の聖徳の高さと存在の重さをずっしりと感じたのを今でも鮮明に思い出します。
※投稿ありがとうございます。



浦頭小教区の 「歴史」を追って VII

ずっと浦頭小教区の歴史をたどって来ました。歴史の織り成す悲喜もごもは、脳裡に鮮やかなシーンを思い浮かべさせます。

今回でこの連載も最後になります。最後は、現在の浦頭小教区のシンボルとなっている浦頭教会の足跡をたどって終わりにしたいと思います。

浦頭教会が建てられた理由には日本が近代化していく中で、当時のこの地のインフラの状況が関係しています。

堂崎教会へ行く道は、今でこそ整備され、車が行き交う程になっていますが、昔はそれ程いい道とは言えず、加えて昭和三十年代後半になると車社会の兆

しも見え始めていました。堂崎のミサへの交通手段として多く使われていた小舟よりも車等に頼った交通の時代へと変わろうとしていました。



昭和三十八年、自分が六才ぐらの時、新しい場所に、新しい聖堂をとという事で聖堂建設準備委員会が設けられ、教会の敷地として、現在の教会の場所、当時 木口末永氏の所有の丘にあった畑の土地が寄進されました。整地を終え、新聖堂敷地の完成を祝い、地固めも兼ねて運動会が計画されました。当時、主任司祭であった松下佐吉神父様によって土地の祝別が行われ、運動会も信徒総出で大盛況のうちに行われました。

その後、すぐに聖堂建設五年計画がたてられます。

現金収入の少ないこの地で割当の負担金を完納するまで相当の苦心と犠牲があった事は容易に想像出来ます。

新教会は、建設委員会を立ち上げて四年目の昭和四十二年、九月、小高い丘にノアの箱舟をイメージした姿として完成しました。

この連載は最初は近年のデータによる信徒数の変化や経済面の推移に触れ、同時に小教区の歴史を草創期からたどって来ました。

確かに信徒数や経済的な面から見ればひしひしと厳しさを感じとれますが、小教区の昔から今に至る信徒の脈々と流れる情熱と行動力は私達にしっかと背中を押してくれる勇氣と原動力を与えてくれていると感じざるを得ません。



銀祝おめでとう

山本一郎神父様は今年二月三日に司祭叙階二十五周年、銀祝を迎えました。神父様は利男さん、ヨシ子さんの長男として生まれ、長女のシスターふみりと共に修道女、教区司祭として神に仕える道を選びました。

これまで長崎教区内の主任司祭、司祭養成のためのコレジオでの責務、また高松教区での司牧も担当してこられました。

浦頭小教区では亡くなった赤尾孝信神父様に続く教区司祭として誕生しました。すぐ上には聖母の騎士の赤尾満治神父様がおられ、シスターの召命も含めて神学校、志願院に行く子供達が多い時代の司祭誕生でした。

山本一郎神父様のご健康とご活躍のために祈りましょう。

また、このような機会に信徒としての召命を各自が熱心に生き、教会、小教区の発展に協力する決意を新たにしましょう。

半泊教会創立百周年

記念の祈り



わたしたちの牧者である主よあなたの愛しきみによって半泊教会は創立百周年を迎えようとしています。この百年にわたる日々、あなたは絶え間なくわたしたちを育み支え導いてくださり溢れる程のお恵みを注いでくださいました。心より感謝いたします。百周年を迎える今も半泊教会は小さな共同体として信仰の火を灯し続けています。どうぞこれからの道のりもわたしたちが迷うことなく、あなたのみ旨に従って歩んで行くことができますように。あなたの声を素直に受け入れることができますように。わたしたちの心を清く汚れないものとしてください。半泊教会がこの地におい

半泊教会百周年

信徒のあしあと

てこれからも信仰の証となり、キリストの光をまわりに輝かせ、あなたの栄光を現すことができますように。わたしたちの主イエス・キリストによってアーメン
(小教区で作成された祈り)

潜伏時代の名ごりを残していた半泊信徒の住居も姿を消しほとんどの人が移動しました。

不便な土地でも巡回教会のミサに参加し、歩くことのできる間は長い道のりを堂崎や浦頭まで来て典札に参加していました。堅信前の中学生達は放課後の「けいこ」にも参加し、夜道を歩いて帰りました。たぶん家に帰り着くときは夜の八時過ぎになつていたと思います。父親は仕事後の疲れもいとわず、懐中電灯を照らして途中まで迎えて

来てくれました。

専任カテキスタをしていた私は、両親と子供達の熱心さを見て感動していました。

出身の司祭、シスター、信徒の皆さんが全国のどこかで信仰を証ししておられると信じ、百周年を心から祝い共に祈ります。

奥浦修道院 異動

転出 ご苦労さまでした。

Sr 木口 直恵 東京
Sr 川口 幸子 本部修道院
Sr 藤原 美幸 鯛ノ浦
Sr 中尾 菊代 聖家族

転入 よろしくお願ひします。

Sr 古木久美子 青砂ヶ浦

《転入》

富上 成美

大阪 尼崎教会より

《転出》

木口 悠也 横浜中原教会
鍋内 凌空 山口下松教会

秘

跡

●幼児洗礼 一月三十日

テレジア・川口 想乃

父 川口広平・母 瑞希

●下五島合同堅信式

浦頭より 三名 一月十六日

鍋内 孝志 小林 美結

鍋内 大蔵 福江教会にて

●ありがとう

木ノ口かたし様 浦頭

坂口 美知子様 上天津町

出口様 東京都

●初聖体 二月二十七日

ヨハネ五島・赤尾 佳樹

保護者 赤尾 美紀

●永遠の安らぎを

パウロ 宮崎 助市 宮原

(三月十八日 九十二歳)

●小教区地区役員補佐

堂崎 入口君子―抹消

『大志と共に 夢に向かって』

三月十五日、奥浦中学校卒業生十五名、三月十七日、奥浦小学校卒業生五名。それぞれが節目の時を迎え、新たな道に旅立っていく。

奥小六年生、卒業して行く彼等、彼女たちが力強く目標や夢を宣言する。

保護者代表のあいさつ「人の心を思いやる気持ちを持ちながら、成長して行って欲しい。」という言葉は、じわりと子供達、会場の人達に染み渡っていく。



2月の奥浦干拓は河津桜の 絶景スポットがいっぱい!!

教会より徒歩8分!!

近郊からの見物人はまずバイパスからの景色を愛で、そして徒歩にてゆっくりと散策。見知らぬ人とも話はずむのも美しい花にはパワー~があるのですね。

奥浦「元気村」の右側の堤防から奥浦中学体育館までのコース



バス路線の奥浦中学の近所「五島四十九番」札所 和布崎神社 栄林寺の裏



空の青! 目には鮮やかな桜...

ちょっと長生きできそうな得した気分。

来年もまたこよう.....皆さんもぜひ!!

手前の枝の影は3月の開花を待つそめい吉野桜

編集後記

又、虐殺の歴史が繰り返される。人類はなぜ、同じ過ちを繰り返すのか。

ウクライナの国民は、小国でありながら巨悪とみなされる大國に対し、勇敢に立ち向かっている。ただ、多くの難民や取り残された国民の一部が逃げ惑い、悲嘆にくれている。対抗する国々は核の脅威の前に、出来る事も限られている中、強力な経済封鎖を発動させている。

そんな中、人道支援に動くNPO等はその動きを活発化させ、日本の教会・カリタスジャパンも素早く反応し、募金や祈りで少しでも世界の平和に寄与しようとしている。

無差別行動ともとれるミサイル攻撃等で、罪もない子供や幼児が亡くなる中、一刻も早く戦争が終わる事、平和への希求を強く望んでやまない。

木口 重憲